

[原著論文：査読付]

史料から見る塩谷温のドイツ留学

黄 冬柏*

Shionoya-On's Study in Germany as Seen in Historical Documents

Dongbai HUANG*

Abstract

It is a well-known fact that the famous Japanese sinologist Shionoya-On(塩谷温) (1878-1962), who made a remarkable achievement in the study of Chinese fiction and opera, wrote his “Lectures on the Introduction to Chinese Literature(支那文学概論講話)” (1919), which had a profound influence on Lu Xun's “A Brief History of Chinese Fiction(中国小説史略)” (1923). In his early years, Shionoya-On(塩谷温) studied at the University of Leipzig from October 1906 to August 1909 in order to learn the methods of German and European sinological studies.

This essay examines the influence of German sinology, particularly that of the sinologist Wilhelm Grube, on Shionoya-On(塩谷温)'s study of Chinese literature, and explores the reasons for his study in Germany and his exchanges with European sinologists from the perspective of modern Japanese acceptance of Western approaches to sinological research.

KEY WORDS : Japan, Shionoya-On (塩谷温), Sinological, Germany

*九州共立大学経済学部

*Faculty of Economics, Kyushu Kyoritsu University

1. はじめに

近代における学問研究の対象として、初めて本格的に中国古典戯曲小説を研究したのは、日本人研究者である。十九世紀末から多くの漢学者がドイツなどに留学し、当時最先端のシノロジーの方法を吸収して戯曲小説の教育と研究に取り組んだ。狩野直喜、塩谷温などはその代表的な人物である。塩谷温は一九〇六年からライプツィヒ大学で西洋中国学とドイツ文献学を学んだ後、中国の長沙にて文献学者・書誌学者として著名な葉德輝に師事して戯曲名作を学び、一九一二年に帰国すると中国古典戯曲小説の研究と東京帝国大学での講義を進めた。一九一九年に出版した『支那文学概論講話』が、中国近代文学の巨匠である魯迅の名著『中国小説史略』（1923年）に大きな影響を与えたことは学界で周知の事実である。

そこで本稿は、東京大学史料室や外務省外交史料館に所蔵されている史料を調査し、関連文献の考察を加えることによって、漢学者としての塩谷温がドイツに留学した理由を明らかにしたい。また、近代日本における西洋の中国学を受容という視点から、ドイツ漢学が塩谷温の中国文学研究に与えた影響についても探ってみたい。

2. 塩谷温とその中国戯曲小説研究

塩谷温(1878-1962)、号は節山、著名な中国古典文学の研究者である。(図1) 儒家を家学とする家柄の四代目で東京に生まれ、大伯父の塩谷宕陰、父の塩谷青山も漢学者であった。塩谷温の弟子鬼沢弘道が嘗て次のように称赞した。

先生は塩谷氏四世の家学を継ぎ水泳と剣道とに心身を鍛錬し文武を兼ね、智仁勇を備えて居られるが、私は特にその意気に感激する¹⁾。

ここでいう「四世の家学」とは、塩谷宕陰(1809-1867)、塩谷箕山(1812-1874)、塩谷青山(1854-1925)、塩谷温と百年以上にわたって受け継がれてきた漢学の系譜を指す。宕陰は江戸末期の儒学者、昌平坂学問所の教授である。その弟の箕



図1:『塩谷先生記念会誌』に拠る

山も幕府の儒官であり、甲府徴典館の督学を務めた。箕山の息子、青山は温の父親であり、第一高等学校の教授を長く務めていた。第一高等学校は、「旧制一高」または「一高」とも呼ばれており、東京帝国大学の予科として全国から優秀な学生と一流の教授陣が集まった。「一高」の学生であった塩谷温は父親のことを「先生」と呼び、「先生」と「一高」の関係について次のように懐かしく語っている。

一言以て之を蔽へば、先生は文武を兼修して、三世の家業を襲ぎ、学者としては将に泯びんとする漢文と剣道とを維持し、教育家としては第一高等学校の質実剛健の校風を養成された。一高は実に天下俊秀の故郷である。…先生は全く一高の育ての親であり、一高は先生の家塾であり、墳墓であった。先生と一高と、これ程ピッタリ際会したものはない²⁾。

幼い頃から厳格な躰をする父親から教えを受けていた塩谷温は、「嚴父と云はんよりは寧ろ嚴師であった。事實、私には漢学の師匠も、作文習字の師匠も、又撃劍の師匠も、盡く先生であった。³⁾」とも述べている。

塩谷温は一八九六年に第一高等学校に入学し、一九〇二年に東京帝国大学漢学科を卒業、大学院で中国文学史を研究し、一九〇六年に母校である東京帝国大学の助教授となる。一九〇六年十月から二年間半にわたってドイツに留学した後、北京へ赴いて中国語を勉強し、そして長沙にて著名な学者である葉德輝(1864-1927)を師と仰いで中国古典戯曲の名作を学び、一九一二年八月に帰国すると中国の戯曲小説の研究と東京帝国大学での講義を進めた。当時開講した「支那戯曲講義」で教材として主に取り扱われているのは、中国古典戯曲名作の『西廂記』である。その講義を聴講した当時の東京帝国大学英文科の学生、著名な文学者である芥川龍之介(1892-1927)は「支那戯曲講義 塩谷温助教授」というノートを残している⁴⁾。塩谷温は一九二〇年に論文『元曲の研究』を提出して文学博士号を授与され、同年に東京帝国大学の教授となる。塩谷温の略年譜を次のように示しておく。(『東方学』第72輯〔昭和61年7月〕に拠る)

明治11年(1878) 7月6日 東京下谷区仲徒士町にて出生

同20年(1887) 3月 学習院に入り10年間普通学修業

同29年(1896) 9月11日 第一高等学校に入り第一部学科修業

同35年(1902) 7月11日 東京帝国大学文科大学

漢学科卒業
同35年（1902）9月11日 東京帝国大学大学院に
入り支那文学史を研究
同38年（1905）6月22日 学習院教授
同39年（1906）9月15日 東京帝国大学助教授
同39年（1906）10月2日 支那文学研究のためド
イツ・中国へ留学
大正 元年（1912）8月16日 帰国
同 9年（1920）3月19日 論文提出，文学博士学
位授与
同 9年（1920）8月27日 東京帝国大学教授
昭和14年（1939）10月11日 東京帝国大学名誉
教授
同37年（1962）6月3日 逝去

もし「四世の家学」が塩谷温にとって漢学の基礎を築いたとすれば，良い先生との出会いや海外への留学が彼の研究の方向性や方法論を決定づけ，それは塩谷温が中国古典戯曲小説の研究と教育に携わる重要な要因となった。このことについて，塩谷温自身は以下のように振り返っている。

私に支那戯曲の手繙きをして下されたのは森槐南先生であり，研究を大成せしめられたのは，葉德輝先生と王国維君であった。…独逸留学中に英のチャイルス及び独のグルーベの支那文学史を読んで，西洋学者の研究が戯曲小説に重きを置けるを知った。北京に留学中，主として中国語を学び，長沙に転じて葉德輝先生に従ひ，元曲西廂と琵琶，明曲牡丹亭と燕子箋，清曲長生殿と桃花扇を学び，王君の曲録（北京で親しく贈られた）及び宋元戯曲史を参考して学位論文「元曲之研究」を完成した⁵⁾。

この研究生活に関する記述から，森槐南，葉德輝及び王国維の三名が，塩谷温の中国古典戯曲小説研究に啓蒙から集大成に至るまでの成長に影響した重要人物であり，ドイツと中国での留学経験が，彼の研究方法と研究内容の形成に多大な影響を与えたことは明らかである。

塩谷温の研究成果は，詩文や戯曲小説など多岐にわたって非常に豊富である。「塩谷温博士著述目録」（『東方学』第72輯）に基づいてその主な著作を以下のようにまとめる。

支那文学概論講話（図2）大日本雄弁会 大正8年（1919）5月
学生必吟 弘道館 昭和2年（1927）12月
唐詩三百首新釈 弘道館 昭和4年（1929）2月
孝経新釈 弘道館 昭和4年（1929）4月

興国詩選 皇朝篇 弘道館 昭和6年（1931）4月
元曲梧桐雨（漢文講座第六卷）弘道館 昭和8年（1933）
興国詩選 漢土篇 弘道館 昭和9年（1934）5月
王道は東より 弘道館 昭和9年（1934）9月
詩経講話 弘道館 昭和10年（1935）5月
頼山陽と日本精神（日本精神叢書）日本文化協会出版部 昭和11年（1936）12月
楠公と頼山陽（多田正知共著）蒼龍閣 昭和12年（1937）
漢詩と日本精神（日本精神叢書）文部省教学局 昭和13年（1938）7月
新字鑑 弘道館 昭和14年（1939）2月
元曲選 目黒書店 昭和15年（1940）4月
作詩便覧 弘道館 昭和15年（1940）7月
西廂記（歌訳）昌平堂 昭和22年（1947）9月
天馬行空 日本加除出版 昭和31年（1956）7月

以上の著述の中、『支那文学概論講話』は間違いなく日本における中国文学研究史上の名著である。これまでの文学史は時代ごとであり，しかも詩文を中心として解釈してきたが，『支那文学概論講話』はジャンルごとに中国古典文学の特徴を解説し，しかも戯曲と小説に詩文より多くの紙面を費

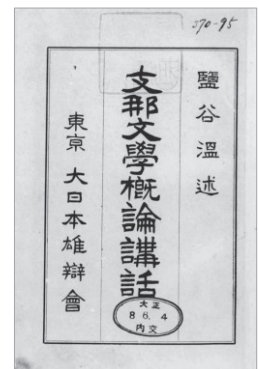


図2:九州大学中央図書館蔵

やした先駆的論著である。一九二五年十一月，陳源は魯迅の『中国小説史略』が塩谷温の『支那文学概論講話』からの盗作であると非難する論文を発表したことによって論争を巻き起こした。盗作とは間違いだが，直接に影響を受けたのは紛れもない事実である。なお，『支那文学概論講話』は『中国文学概論』と題を改め，一九八三年に講談社学術文庫の一つとして刊行されている。

『支那文学概論講話』は，西洋の中国学における研究成果の活用とヨーロッパにおける中国文学作品の紹介を重視し，戯曲と小説の芸術的価値と文学史における位置づけを高く評価したもので，当時としては間違いなく先駆的な意義を持つものであった。しかも著者である塩谷温自身の戯曲研究も，近代の科学的アプローチと国際的な中国学の視点を取り入れ，日本の伝統的な漢学から近代における新しい中国学の世界へと移行している。塩谷温のこのような独創的な研究は，彼

の海外留学の経験と切り離せない。二年半あまりのドイツ留学は、塩谷温に研究の視野を広げさせただけでなく、当時の一流の中国学者と直接交流する機会を与え、後の彼の中国戯曲小説研究に大きな影響を与えたのである。

3. ドイツ留学の目的

明治三十九年（1906）十月二日、『読売新聞』は「文部省留学生」との見出しで帝国大学及び官立学校教官の四人が海外へ留学の情報を次のように報じている。

昨日左の通り留学を命ぜらる

東京帝国大学文科大学助教授 塩谷温

支那文学研究として四ヶ年間清国に留学…⁶⁾

実際の当時状況は、この新聞記事とは若干異なっている。外務省の史料によれば、塩谷温は清国（中国）のほかにドイツへの留学も命ぜられる。明治三十九年十月三日、文部大臣牧野伸顕は外務大臣林董に、ドイツ・清国・イギリス及びアメリカへ留学生五名を派遣することに伴う旅券の発給を求める以下の書簡を送っている。

…海外旅券至急御送付相成度此段及照会候也。明治三十九年十月二日文部大臣牧野伸顕、外務大臣子爵林董殿、記 東京帝国大学文科大学助教授塩谷温、海外旅券第46883号、独・清国四箇年。広島高等師範学校教授半田正身、海外旅券第46888号、英・独参箇年。広島高等師範学校教授長屋順耳、海外旅券第46885号、英・米参箇年。大阪高等工業学校教授崔見正四郎、海外旅券第46886号、英・独・米参箇年。盛岡高等農学校教授石丸文雄、海外旅券第46887号、独参箇年。明治三十九年十月三日起草、同〃年〃月〃日発遣第一二五号送第一一五号送第九二号 大臣。⁷⁾

その後、外務省はこれら五名の留学生に旅券を発行し出国を許可した。塩谷温はすぐにこの月の三十日にドイツへ向かって出発した。「文部省外国留学生表」(図3)によれば、塩谷温の留学期間は明治三十九年（1906）十二月二十三日から明治四十三年（1910）十二月二十二日まで「満四ヶ年」であった⁸⁾。これによって、文部省は当初、塩谷温をドイツに二年、中国に二年滞在させる予定であ

姓名	生年月日	在学期間
塩谷温	明治七年	明治三十九年十二月二十三日から明治四十三年十二月二十二日まで
半田正身	明治七年	明治三十九年十二月二十三日から明治四十一年十二月二十二日まで
長屋順耳	明治七年	明治三十九年十二月二十三日から明治四十一年十二月二十二日まで
崔見正四郎	明治七年	明治三十九年十二月二十三日から明治四十一年十二月二十二日まで
石丸文雄	明治七年	明治三十九年十二月二十三日から明治四十一年十二月二十二日まで

図3: 国立国会図書館蔵

ったことが推察される。しかし、ドイツでの学習が進むにつれ、ドイツに来てから三学期（一年半）の明治四十一年（1908）四月、塩谷温は留学期間について新たな考えが生まれ、ドイツの留学を延長し、中国の滞在期間を短縮することを希望した。では、中国文学の研究である塩谷温は、なぜドイツに留学したのか、なぜドイツ滞在を延長して中国滞在を短縮したのか、そしてドイツで何を学んだのか。その理由は、彼が文部大臣の牧野伸顕に宛てた「独国留学延期出願理由書」(図4)に五点を挙げて詳しく説明されている。

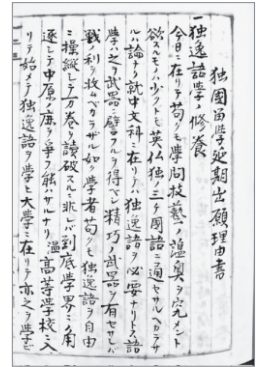


図4: 東京大学史料室蔵

第一に、「ドイツ語学の修養」を高めるためである。塩谷温が第一高等学校でドイツ語を学び始め、ドイツに来てからまた教科書を読む程度であり、研究のために使いこなすには至っていないと感じ、もし今は中国に行ったらドイツ語のレベルアップに影響すると主張した。

今日ニ在リテ苟クモ学問技芸ノ蘊奥ヲ究メント欲スルモノハ、少クトモ英仏独ノ三ヶ国語ニ通ヤサルヘカラサルハ論ナリ。就中文科ニ在リテハ、独逸語ヲ必要ナリトス。語学ハ之ヲ武器ニ譬フルヲ得ベシ。精巧ノ武器ヲ有セサレバ、戦ノ利ヲ収ムベカラザル如ク、学者苟クモ独逸語ヲ自由ニ操縦シテ万巻ヲ読破スルニ非レバ、到底学界ニ角逐シテ中原ノ鹿ヲ争フ能ハサルナリ⁹⁾。

第二に、「中国文学研究の基礎を強化する」ためである。塩谷温は、文学の研究は一つの専門にとどまるべきものではなく、哲学や心理学・美学などさまざまな知識を基礎とすべきであると指摘した。

故二一國ノ文学ヲ研究スルニ當リテハ、哲学・心理学・美学・神話・伝説・言語・文字・文明史・美術史・文学論等ニ一般ノ基礎ヲ置キ、更ニ外国文学ノ特性沿革ニ参ヘ稽ヘザルヘカラズ。殊ニ支那文学ノ如キ、未ダ多ク開拓セラレザル地ヲ壟カントスレバ、外国文学研究ノ方法ニヨリテ、之ヲ研究セザルベカラズ。是余ガ独逸國ヲ先ニシ、文学研究ノ素ヲ養ヒテ、然後清国ニ入り、支那文学ヲ専攻セント志セシ所以ナリ¹⁰⁾。

実際にも、塩谷温はドイツに来てから一年半の間では、大学での講義を受け図書館の蔵書を読むだけでなく、博物館や美術館を訪れて見聞を広め、ドイツ各地

やイタリア・オーストリア・スイスを旅して将来の研究の基礎を固めた。

第三に、「中国文学研究」のためである。塩谷温は、当時のヨーロッパの学界の研究視野が非常に広く、エジプトやバビロンからインド、中国へと範囲が広がり、経典や史書の翻訳・辞書の編纂から、歴史・地理・哲学・言語・文学などの研究に至るまで、研究成果は非常に豊富だと指摘した。そのため、ドイツの研究環境は中国よりも格段に優れていると彼は考えていた。

独逸ノ大学中、支那学ノ講座ヲ置クモノニ所ニ及ベリ。其講義スル所固ヨリ独逸学生ノ為ナレバ、吾人ニ取リテハ如何ニモ物足ラヌ感アリト雖モ、之ニ由テ欧洲支那学ノ一般ヲ知ルヲ得バ、以テ他山ノ石トナスニ足ルノミナラズ。清国学界ノ振ハザル久シ、耆宿凋落シテ、後継ノオナク、新学勃興シテ、古学ヲ講習スルモノナシ。故ニ北京ニ大学堂アリト雖モ、是新学ノ講習所タリ、吾人ノ遊ブベキ学堂ナク従フベキ師ナシ。是清国ヘ留学スルモノノ最モ苦シム所ナリ。故ニ支那文学ヲ専攻スルノ士ト雖モ、豫メ欧洲ニ在リテ支那学者ノ説ヲ聴キ、其著ヲ讀ミ、自家研究ノ方針ヲ定メテ、然後清国ニ入ルヲ上策トナス¹¹⁾。

第四に、「現代中国語学研究」のためである。塩谷温は東京帝国大学大学院生として夏休みに北京を訪れた際、外国人に中国語を教える専門機関がなく、ついていける教師もいないこと、教科書のほとんどがイギリス人の著者によるものであることを知った。そのため、彼は「故ニ他日柏林ノ東洋語学校に遊び、支那語研究ノ歩ヲ進メ、然ル後清国ニ入リテ、之ヲ實習セント欲ス¹²⁾」と考えていた。また、ドイツ語などの外国語を学ぶ目的は、現代中国語を研究するためだった。彼は次のように述べている。

支那文学ヲ学バントスルモノ宜シク基礎ヲ語学ニ置カサルベカラザルハ論ナシ、而シテ我国ノ漢学者ニシテ現代ノ清語ニ通セザルハ通弊ナリ。殊ニ古文ト今文トノ差異甚シキ支那文学ニ在リテハ、単ニ古文ノミヲ以テ支那文学ヲ蔽フベカラズ。今文ノ沿革ヲモ合セ学バサルベカラズ。是現代支那語ノ研究ヲ必要トスル所以ナリ¹³⁾。

第五に、「文字研究」のためである。塩谷温は中国文学の研究に加え、古代エジプトのヒエログリフやバビロニアの楔形文字などと漢字を照合する文字学の研究にも取り組みたいが、当時の中国にはこのような研究ができる環境がなく、ドイツはそのような環境を備えているため、ドイツでの留学期間の延長を希望した

のである¹⁴⁾。

以上の五つの理由をまとめ、塩谷温は次のように結論づける。

抑温ノ独逸国ノ留学ヲ先ニセシハ、先ツ独逸語ニ精通シ、文学研究ノ基礎ヲ固メ、欧洲支那学者ノ研究法ヲ取り、且支那語学研究ノ緒ヲ外国ニ修メ、充分ノ準備ヲ整ヘテ、清国ニ入り、實際ニ就キテ研究シ、以テ生涯ノ大成ヲ期セシ所以ナリ。清国ニ在リテ研究スルコトノ困難ナルダケニ、多大ノ日月ヲ要スルハ論ナシ。故ニ四年ノ留学期間中三年ヲ独逸国ニ送り、僅ニ一年ヲ清国ニ暮ラスハ、一見不利ニ似タレトモ、今日ニ在リテ最モ急務トスル所ハ独逸語ノ研究ナリ、文学研究ノ基礎ヲ固クスルコトナリ、支那文学研究法ノ研究ナリ、支那文学ソノモノノ研究ニ至リテハ畢生ノ事業ナリ¹⁵⁾。

要するに、塩谷温はまずドイツに留学し、ドイツ語に習熟して文学研究の基礎を固め、またヨーロッパの中国学者の研究方法に学んでドイツで中国語学を研究し万全の準備を整えた後、中国に渡って実際の中国古典文学研究を行い、生涯における研究の大成功を実現することを目指すつもりであった。また、彼は明治三十六年（1903）と明治三十八年（1905）、それぞれ北京と満州（東北）に遊学するために中国を訪れており、中国の状況のある程度わかっていることから、中国留学の期間を短縮しても特に問題がないことを指摘した。そこで、夏学期が終わる明治四十二年（1909）八月十五日までドイツでの滞在を延長し、その後再び中国に留学することを提案した。

塩谷温が文部大臣の牧野伸顕に宛てた「独逸留学延期出願理由書」は明治四十一年（1908）四月三十日（図5）に書いたが、文部省と濱尾新東京帝国大学総長との協議の結果、同年六月二十五日に塩谷温の申請が承認された。しかし、「文部省外国留学生表」によれば、塩谷温は「延期半年（独逸ニケ年半、清国ニケ年）」となっており、文部省はドイツでの滞在延長に同意しただけでなく、中国での滞在期間も短縮しなかったことがわかる¹⁶⁾。実際には、大正元年（1912）八月十六日に帰国するまで、塩谷温は約二年半あまりドイツに留学した後、三年近く中国に滞在したのであ

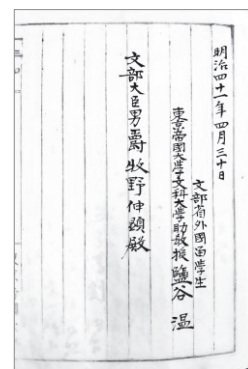


図5: 東京大学史料室蔵

る。

結論から言えば、塩谷温がドイツに留学、しかも予定の滞在期間を延長した最大の理由は、中国文学研究のために西洋の中国学の研究方法を学ぶためであった。彼は「ヨーロッパ漢学者の研究手法」に賛同し、中国文学の研究を発展させるためには、哲学・心理学・美学などの西洋近代学問の研究を基礎とし、外国文学の研究手法を参考にする必要があると考えたのである。勿論、この目標を達成するのは容易なことではないから、塩谷温が座学とフィールドワークを両立させるだけでなく、ライプツィヒ大学を飛び出してドイツ国内、さらには他のヨーロッパ諸国の中国学者や研究機関を訪ね、多くの本を読むだけでなく、多くの旅をしたわけである。

なお、塩谷温より前に、日本近代における中国哲学研究の先駆者とされる服部宇之吉（1867-1939）も、文部省から「東京帝国大学文科大学助教授文学士服部宇之吉（慶応三年四月生）、漢学教授法及同攻究法研究ノ為、満両年間独国へ留学ヲ命ス。」と命ぜられる¹⁷⁾。一年目（1901-1902）は同じくライプツィヒ大学で留学した。ちなみに、ライプツィヒは、ドイツ東部にあるが、森鷗外・井上哲次郎など日本からの留学生が多く訪れ、上田萬年（1867-1937）・服部宇之吉など帝国大学の教授たちの中にもライプツィヒに滞在した経験を持つものは多かった。その当時、官費留学生が中国へ行く前にドイツで勉強させたのは一般的なことだったようである。文部省が帝国大学の漢学教授に求めていたのは、伝統的な漢学に精通すると同時に、西洋の漢文学の研究法や教授法も身につけていることであつたろう。

4. おわりに

本稿では、塩谷温とその中国戯曲小説研究、そして塩谷温がドイツに留学した経緯と理由などについて、史料や関連文献を通して考察してきた。ドイツ及びヨーロッパの漢学研究は塩谷温の中国文学研究に与えた影響という事例から、明治維新によって覚醒した文人の西欧崇拜が顕著であり、同時に明治日本が目指した、今日まで続く欧米化路線が顕著であることを窺える。

日本近代化の象徴的な文人として、塩谷温が日本漢文学史と中国文学研究史における位置づけは、さらに全面的な調査と研究を行う必要がある。塩谷温は伝統的な漢学者の家系に生まれ、本人も漢詩文に精通しているにも関わらず、その中国戯曲小説の研究手法は近

代的な西洋中国学に傾いており、それは三年近くにわたるドイツ留学とヨーロッパ遊学と密接な関係があると思われる。このヨーロッパの留学経験は、塩谷温に研究の視野を広げさせただけでなく、当時の一流の中国学研究者と直接交流する機会をもたらし、彼の中国戯曲小説研究に大きな影響を与えたのである。

注

- 1) 鬼沢弘道（1956）『天馬行空・序』（日本加除出版株式会社）、5頁。
- 2) 塩谷温（1956）『天馬行空』（日本加除出版株式会社）、204頁。
- 3) 同上注、204頁。
- 4) 詳しくは篠崎美生子ほか（2017）「芥川龍之介聴講ノート『支那戯曲講義 塩谷温助教授』翻刻」（『恵泉女学園大学紀要』第29号、147頁-180頁）を参照。
- 5) 同注2）、91頁。
- 6) 藤井省三（1994）「塩谷温」（江上波夫編著『東洋学の系譜』第2集、大修館書店、94頁）に拠る。
- 7) 文部大臣牧野伸顕（1906）「塩谷温外五名独英米清へ留学之件」（アジア歴史資料センター、Ref. B16080830500、『文部省留学生関係雑件』第3巻、外務省外交史料館、請求番号6-1-7-2）。
- 8) 文部省専門学務局（1908）「文部省外国留学生表」（国立国会図書館、請求記号Y994-J16119）4頁。
- 9) 塩谷温（1908）「独国留学延期出願理由書」（『留学関係書類G18』、東京大学史料室、123頁）。
- 10) 同上注、124頁。
- 11) 同注9）、125頁。
- 12) 同注9）、126頁。
- 13) 同注9）、126頁。
- 14) 詳しくは注9）、127頁-128頁を参照。
- 15) 同注9）、128頁。
- 16) 文部省専門学務局（1909）「文部省外国留学生表」（国立国会図書館、請求記号Y994-J16120）4頁。
- 17) 文部大臣樺山資紀（1900）「服部宇之吉独へ留学之件」（アジア歴史資料センター、『文部省留学生関係雑件』第2巻、外務省外交史料館）。

参考文献

- 1) 塩谷温（1919）『支那文学概論講話』、大日本雄弁会。
- 2) 塩谷先生記念会編（1939）『塩谷先生記念会誌』、東京帝国大学文学部支那哲文学研究室。
- 3) 塩谷温（1956）『天馬行空』、日本加除出版株式

会社.

- 4) 江上波夫編著(1994)『東洋学の系譜』第2集,大修館書店.
- 5) 譚皓(2018)『近代日本対華官派留学史研究(1871-1931)』,社会科学文献出版社.
- 6) 大木康(2023)「塩谷温(1878-1962)的中国戯曲小説研究—兼及東京大学早期的中国文学科」,『中正漢学研究』第41号, 1-24頁.
- 7) 拙稿(2023)「著名漢学家塩谷温留学德国考略」,『第七届世界漢学論壇會議論文集』136-143頁.

〔付記〕

本研究において史料の閲覧・調査にあたっては, 東京大学史史料室及び東洋文化研究所の資料の複写と掲載のご許可を頂いたことに厚く御礼申し上げます.

Received date 2023年11月6日

Accepted date 2023年12月20日